

第 6 回 審議会意見等の分野別整理

1 基本構想の検討

要点	意見要旨
目標人口について	推計値の 134,000 人強から 138,000 人という目標値を定め、政策的な効果を積み上げたということで、計画の作り方として将来推計と同時にこの計画の中で様々な施策を講ずることによって、産業あるいは経済にどういった影響があるかを考えながら計画を作る、こういった目標を設定するというのは良いと思う。
	地区ごとの人口動向分析というのは、それを踏まえた施策ということで連動してくる。活性化とか生産年齢人口を減らさない点にきちんと着目して、基本計画に何らかの形として施策の中に出していくのが大事だと思う。基本計画に反映されていく中で、目標がただの目標でなく、具体性を持った目標として理解できるようになる。
	人口目標を掲げるなら、生産年齢人口の層が、子どもを育てやすい、あるいは産みやすい、そういう施策がセットでないといけない。
	人口に関して、私どもの子どもの頃を考えると、年少人口が 4 人に対して老年人口が 1 人といった人口構成になっていた。それが変化して、年少人口と老年人口の比率が変化してきた。平成 22 年では年少人口が 17,900 人に対して老年人口が 32,000 人となっている。生産年齢人口は 88,000 人で、今後、高齢社会で働かない人が増え、計画の目標年度の平成 34 年度では生産年齢人口は 75,000 人と想定されている。この生産年齢人口もっと光をあてて、雇用の場だとかベンチャーで創業できるような仕組みだとか、通勤が非常に大事だと思う。都心で働ける付加価値の高い労働者が青梅に住むということも必要だけれども、青梅に住んで働ける、あるいは青梅に働きに来ると。
	今回提示された目標人口の是非は置いておくにしても、10 年後の推計値に 4,000 人プラスした人口を目標として掲げ、それを実現するためにどうしているかという姿勢はとても良いと思う。目標人口だけではなく、そういった目標を選定して行けたら良いと思う。
基本構想から基本計画への展開について	メリット・デメリットを比較して、青梅市としての戦略を打ち出す必要があると思う。そういう人達を惹きつければ市の活力が増え、財政的にもよくなる。
	基本計画は、とてもしっかりしたもので安全であると思うが、他の市と比べてここが青梅の良さだということが見当たらない。もっと斬新なアイデアを出したものがほしい。

要点	意見要旨
	基本構想に基本方向が大きな柱として 10 項目掲げられているが、この基本方向の中で、明らかに政策と結びつく表現になっている部分と、一般化されて抽象化されているような表現になっている部分があり、様々な取組みができる部分と、かなり施策として集中的に書き込んでいかないといけない部分が出てくるのではと思う。
	分野がはっきりしない中で出ている内容が市民参画・男女平等というような内容になっていて、かなり大きな範囲を広げているけれども中身は限定されているというような表現になっているので、かなり相互のいろんな関係を踏まえてこの施策分野の内容も考えていかないといけない。
	施策の柱の中身がもう少し広がりがあったほうがよいのでは。基本方向の理念を生かした、新しい検証により抽出された課題の中身を示していかないと、せっかく柱を立てておきながら、基本計画では個別の内容だけになり、例えば教育内容の充実だけでは全く議論の余地がなくなっていく部分があるので、理念と課題が対になった書き方が必要ではないのか。
	次回、基本計画の提案が出てくると思うが、問題点、欠点、長所を具体的にすべき。今回の会議での提案をすべて書く必要はないと思うが、具体的な言葉で表現しないと何のことかわからない、どうしたらいいかわからない。
	財政が厳しくなる、生産人口減るといような御意見がある中で「持続的に行政運営ができるまち」ということが大きな柱となっていると思うが、このまちづくりの基本方向というものの答えが施策分野検証等により抽出された課題の中で、答えが出ているかについてはわかりにくい感じがする。もっとストレートにこういう事が大きな問題だということで、抽出された課題については、答えそのものよりも、これが駄目だというものをもっと具体的に持ち寄ったうえで、どうするかという次の形になるのではないか。
	協議・検証等により課題がかなり出てきた。まず、こうした内容を詰めていく必要があると思うが、課題の中でもこれまで継続してきた課題があり、そうした課題には原因がある。その原因に対応しない限り、当然課題はなくならないと思う。どうしてできないのか意見を出し合って、確認していかないと結果も出ないと思う。
	計画書を作るのが仕事ではなく、計画に記載された内容がきちんと実施できるように作っていただきたい。
	何をしていけばいいのかというのが難しい時代だが、市として行動することは行動するというような形で進めてほしい。
	施策項目ごとに多くの取組が上がっているが、当然優先度をつけながら、きちんとできることを実施していくことが必要である。
	具体性を持った文言にしていく必要性を強く感じる。

要点	意見要旨
	将来ビジョンというか、10年後にはこういうまち、こういう風になるという表現が不足している気がする。また、それに向けての説得力も欠けている気がするので、計画の中で具体的な表現を記載する必要がある。
	全体を通して、こうした夢があり、それを目的として、それに向けた取組のストーリーづくりが必要ではないか。
	課題の書き方が抽象的過ぎるので、本当に困っている課題は何かを具体的に記述して、それを解決するためにはどんな施策があるかを設定する。 施策の検討について、1から10の柱ごとに順次検討をするのでは、効率が悪いので、こういう問題とこういう問題を解決するためには、こういうことでパッケージというか、1つの施策で対応できることを考えてもらいたい。 全部個別に対応していたら絶対にうまくいかないのでは、重点施策を中心にグルーピングして施策を打ち出すことが重要ではないか。
	課題解決型ばかりでは夢がない。将来は青梅市をこういうまちにしたいといった夢の部分もある程度ないと元気がでないと思う。

2 分野別事項

(1) 自然・安全安心・生活・環境

要点	意見要旨
放射能に対する安全対策	学校給食も含め地場の野菜を食べていきたいが、放射能に対して外に向けて見える安全対策をしっかりと打ち出してほしい。
災害への心構え	災害に対して関心が高まっている。立川断層が近隣にあるが、青梅市の地域は地盤が比較的安心なところだという風にも言われている。 基本構想素案で、市の特性として「市域の地盤が全体的に硬く、地震の揺れには比較的強い地域であるといわれています」と書いてあるが、こうした表現は外してもらいたい。地震が起きれば必ず被害が起きるので、私自身も青梅は地盤が硬いから地震に強いと思っていたが、青梅の直下で地震が起きれば地盤が硬くても関係ない。我々が常識だと思っていることが本当に常識なのかを常に問いながら作成していただきたい。
地域における安全・安心の取組	自治会連合会としては安全・安心のまちづくりの中で、防犯の確立ということでは、防犯パトロールなどやっているが、一生懸命やっているから課題ではないということなのか、このことは安全・安心のまちづくりの事業に入るのか。交通安全も、防犯も消防・防災の充実も、自治会連合会としては一生懸命やっているから載せていないのか、抜けているのか、あてにしていないのか。

(2) 教育・文化・スポーツ・交流

要点	意見要旨
子どもの学習支援	<p>小学校4年生くらいからの学習支援が必要ではないか。特に経済困難な家庭で、親の年収が子どもの学力に反映する世の中ではないか。小学校5・6年生から中学生を対象に塾に行きたくても行けないような子ども達を支えるシステムを考えていただきたい。</p> <p>勉強する機会に恵まれていない小学校高学年から中学生を支援するような場所が必要なのでは。</p>
様々な連携に基づく学校教育の充実	<p>施策の柱の3で「次代を担う子どもをみんなで育むまち」、施策の柱の9で「みんなが参画し協働できるまち」と表現されている。つまり力を合わせてみんなで子どもたちを育てていきましょう、協働しましょうという理念が掲げられているが、掲げられた施策分野は限定されている表現になっているので、相互の関係を踏まえて施策分野の内容も考えていくべき。「みんなで育む」ということが施策分野の中に本当に担当者の理念として描かれながら、中身の課題を整理しているのか。まだ見出し的な単語しか掲げられていないので、わからないところもあるが。</p> <p>学校教育の充実の項目で、「みんなで育む」との表現があるが、例えば、学校運営連絡協議会の状況、地域の人材活用における市民の協力、児童館といった施設、小中高など教育機関の連携、社会教育機関との連携といった今まで意見として出されたものがそのまま示されているようなものになっているので、理念を話し合っ柱を立てていく訳だから、その課題にもその理念を踏まえたような表現があるとよいと思う。</p> <p>学校教育の充実のところ、教育内容の充実とあるが、具体的ではなく、具体的なことを書かないと議論にならない。</p> <p>義務教育での地域の高校との連携を考え、進路先の高校と交流を図ることや教育施設関係を結ぶことも具体的に入れるべき。</p> <p>小中一貫をきちんと考えましようとか、地域の高校との連携を考えて進路先の高校との関係で交流を図っていくとか教育施設関係を結んでいくっていうようなことも具体的に入れていかないといけない。</p>
(仮称)多摩文化ホール	<p>都立(仮称)多摩文化ホールとあるが、この施設の内容、具体化の可能性、青梅市の関わり方をするのか。</p> <p>新町地区の公園の敷地にホールが建設できないか。現状、中学校の合唱コンクールなどは福生や昭島のホールを借りて実施している。青梅市の小中学生の合唱コンクールが青梅市内でできるようなホール、それに付随して異世代交流できるような子どもの居場所ができればと思う。</p>

要点	意見要旨
姉妹都市交流について	姉妹都市交流は非常に大切だが、今後十年間でも従来通りとするのか、あるいはやめるのか、継続しつつあり方を変えていくのか、さらに交流先について考えがあるのか。
	ポッパルトとの国際交流は今年で47年目と長い歴史があるが、今の青梅市とポッパルトとの関係は仲良しクラブのまま今まで続いてきている。これまで費用をかけて交流してきたが、経済的、社会的な、青梅のためになるようなことを国際交流から何か学べているか疑問に思う。

(3) 福祉・子ども・健康・社会保障

要点	意見要旨
高齢者の位置付け	高齢者を福祉の対象とだけするのではなく、ボランティアや地域づくりの担い手として捉えることを入れてもいいかもしれない。子どもが少ない中で敢えて高齢者の位置付けを積極的なものにする事で、市の特性である自然に恵まれた地域づくりにも貢献できること、ひいては介護予防にも繋がる。こうした高齢者が社会参加する場としてユニークさや先進性を特徴とするボランティアやNPOとの協働を位置付けてもいいと思う。
高齢者福祉施設入所者とのかわり	青梅に介護施設や病院が多く立地しており、入所・入院者は市外からの方が多いと思うが、そうした2,000人の方々が街中や公園で行動することはあまり考慮しなくてよいかもしれないが、散歩する人もいるので、そういう方への配慮を考えているのか。
	青梅市に数多くある高齢者福祉施設に入所している方は、青梅市の市民だけではないが、その方々に対してこの計画の中でどう対応していくか考えなければいけない。援護を必要とする方々として扱うだけでなく、協働体制の中に取り込んで、いろいろな施策の中に参加できる方法を考えることが大切だと思う。
	他の区の例で、特養老人ホームを小中学校と併設で整備したことが大きく報じられていた。そうした学校併設の老人ホーム、あるいは学校併設の幼稚園などの施設の現状を把握して、いいものがあれば取り入れるべき。
高齢者のアクセス	足腰の悪い高齢者のためにコミュニティバスやその他のアクセスを保障する試みがあってもいいのかもしれない。
地域人材の意見聴取	地域人材という点で学校関係では多摩リハビリテーション学院にも、リハビリや介護で活躍されている先生方おり、地域の貴重な人材として色々意見を聞くことが出来ると思う。
高齢者の楽しみづくり	例えば他の市では市民センター的な施設を利用し、高齢者を対象としたカジノゲームを行い、認知症予防なども行っている。それを市で運営している。あまり保守的ではなく楽しめるようなものがほしい。

要点	意見要旨
<p>子どもの居場所づくりと世代間交流の展開（児童館のあり方・元気高齢者の活用）</p>	<p>子ども、特に小学校高学年以上の子どもが流出したり、入ってこないことに対して子育て環境や教育環境の整備を再考する必要があります。他の地域では児童館を基盤に、子ども相談や食育、世代交流の場となっている。そういった意味で子育て支援の場づくりが重要である。</p>
	<p>パブリックコメントで児童館に対する意見が多いが、こうした施設を新しく検討するなら、元気高齢者、団塊の世代の方の活用も考え、児童館という名称ではなく、元気な高齢者と子ども達が一緒に過ごせるような空間、異年齢交流館が必要なのでは。それが新しく作る必要があるのか、市民センターをもっとよりよく活用できるようにするのか、そのどちらがいいのかっていう部分はまた別なことかなとは思ふ。</p>
	<p>施設を整備するには財政の負担が大きい、また、子どもだけに焦点をあてた児童館の整備という時代ではない。核家族が多くなり、やはり高齢者と交流できる子ども達が少なくなっているの、そこで伝統的なものが途切れている。そう考えるとやはり高齢者と子ども達が一緒に集えるような居場所づくりは絶対に必要だと思う。児童館ではなくて、異世代交流できる場所を設置すればよいと思う。異年齢交流のための拠点として新しく整備するのか、市民センターなど今ある施設を活用するのかの検討が必要。</p>
	<p>子どもの居場所づくりとしては、既存の市民センターを利用して子ども、今は乳幼児の応援の広場などを開催している。試みとして去年の10月から小学生を対象に子どもサロンとしてアナログゲームを集めて、子ども達が集えるような広場を開催している。そうした取組が広がり、市民センターの1室確保というのは難しいかも知れないが、遊びのスタッフ、相談できるスタッフがいる場所の設置を広めていけば財政的にも困難ではないと思う。</p>
	<p>子ども、各市民センターに児童館ではなくユニークな他世代交流の居場所があるとPRできると若い世代も立ち寄ってくれると思う。</p>
	<p>異世代交流の推進という記載があるが、ここで具体的にどんな事業をイメージ、あるいは想定されているのか。</p>
	<p>子育て世代の層で、うつ病など精神的な困難を抱えた方が多い。やはり核家族なのでお年寄りなどのアドバイスが聞けない、子どもどう育てていいかわからない、育てるのが大変なので子どもはひとりで十分という声をよく聞く。そこで児童館など高齢者の方たちも集まって一緒に集える施設を整備していただきたい。</p>
	<p>児童館の問題だが、パブリックコメントでも児童館の整備という意見が多い。しかし、現状の行政では整備が難しいと思う。また、そこを行政に頼るという姿勢もどうかと感じる。児童館がほしいといっている若い夫婦が昼間働きに</p>

要点	意見要旨
	<p>行くために子どもを預けておきたいというニーズに対して、何をしてほしいのかを分析し、市や市内にある企業がどういう形でサポート・フォローしていいのかを考える必要がある。例えば、別に児童館という建物を新しく建てなくても、今ある学校の空き教室や平日昼間などあまり使われていない自治会館といった施設を活用する、また、その施設を活用できるようなプランを出してきた市内の団体・企業を支援するというような施策もあると思う。</p> <p>生産年齢人口を増やすことと相反するかもしれないが、児童館がほしい、子ども達を預かってほしいというニーズがあるが、そのニーズを満たすために高齢者の活用があると思う。児童館を必要とする人たちのニーズを満たすために、新しい建物を整備するだけでなく、今ある施設を活用して、高齢者がそこで子どもを預かり、アルバイト料を出すといったビジネスモデルが作れないか。若い人たちが子どもを育てやすい環境づくりと同時に、高齢者が働ける環境づくりも整備できるのでは。若いうちは都心の企業に通うが、定年後に青梅で働ける環境があり、定年後の人達も新しい労働人口になってもらえるような環境整備が今後必要では。</p>

(4) 産業・都市基盤・観光・雇用

要点	意見要旨
青梅線の 利便性向上	生産年齢人口の増加のためにも、近隣市町と連携して、青梅線の利便性向上を図るべき。
青梅らしい 中心市街地の 整備	中心市街地活性化の計画を進めており、青梅駅前周辺の活性化について検討しているが、その話の中で青梅市の魅力は何かと考えた際に、やはり青梅らしさは自然であり、緑は変えがたい市の魅力だと思う。ところが中心市街地といわれている3駅の周辺には緑がない。青梅駅前からは永山丘陵の素晴らしい新緑が見え、反対側を見れば長淵丘陵が見えるが駅周辺はほんとに寂しい。そこで永山丘陵から長淵丘陵までをグリーンベルトのように一本の緑で繋いで青梅でも駅周辺を単なる商店街ではなくて、その緑のゾーンとして整備するなど、青梅らしさを実感できる、外に向けてアピールするような街区を整備する必要があるのでは。
雇用の場の 確保	昼夜間人口の議論もしたが、人、あるいは産業、経済が循環するきめ細かい政策が必要では。担税力の部分で、市街地に人が住まなければ地価が安くなり固定資産税の収入も下がる。今であればまだポテンシャルがあるので、担税力のある人の確保を図らないと青梅市も財政的に厳しいことになる。
国際交流から の産業振興	姉妹都市であるポッパルト市から送られたぶどうの苗を元に、青梅のワインを醸造するなど産業化はされている。今後は、ポッパルト市のワインを青梅の

要点	意見要旨
	産業として育てられないか。難しいところもあるが、従来の国際交流から発展して新しい関係を作るべきだと思う。
市民と協働した施設整備のあり方	施設整備について、行政の財政難の中、例えば文化ホールのために市民も一緒に資金を出しあって整備するという考え方もあると思う。ただ単に行政が作りませんでした、市民と一緒に協力し合って一つのものを作り上げる。市民提案型協働事業ということが始まっていることもあり、行政と市民が協働して、文化あるいは子ども、高齢者まで関係する施設の整備もあるかと思う。
テーマパークの整備	高齢者から小さな子どもたちが楽しめる大きなテーマパークを作ってほしい。
ウメ輪紋ウイルス対策	梅の病気の発生から3年が過ぎており、今後も継続的な対策が必要だと思う。生産者も高齢者が多く、再生ができるのかも不安な部分もあり、計画にきちんと位置づけて取組んでいただきたい。

(5) 協働・コミュニティ・行政運営

要点	意見要旨
高齢者の社会参加	【再掲】 高齢者を福祉の対象とだけするのではなく、ボランティアや地域づくりの担い手として捉えることを入れてもいいかもしれない。子どもが少ない中で敢えて高齢者の位置付けを積極的なものにする事で、市の特性である自然に恵まれた地域づくりにも貢献できること、ひいては介護予防にも繋がる。こうした高齢者が社会参加する場としてユニークさや先進性を特徴とするボランティアやNPOとの協働を位置付けてもいいと思う。
持続的な行政運営	【再掲】 昼夜間人口の議論もしたが、人、あるいは産業、経済が循環するきめ細かい政策が必要では。担税力の部分で、市街地に人が住まなければ地価が安くなり固定資産税の収入も下がる。今であればまだポテンシャルがあるので、担税力のある人の確保を図らないと青梅市も財政的に厳しいことになる。
情報化の目的の明確化	情報というものをなるべく多くの人と共有する必要がある。基本計画の体系で情報化の推進があるが、取組としてはITインフラを整備する、ハード的な施策が多い。こうした目的があり、こうした整備すると将来はこうなるという将来ビジョンというものが見えてほしい。
定住促進に向けた取り組み	青梅市の中でも成木地区などは、廃屋や空き家がかなりある。そういうところに、青梅市の人そこに住むだけでなく、外部から若者や起業を考えている人、子どもを産めるような人達をもっと受け入れるような、何か具体的な政策を打ち出してほしい。

要点	意見要旨
	青梅に定住している人、青梅に移動してくる人のためにどういうライフスタイルプランが出来て、それを実現するために、その現場としてたとえばどういうビジネスプランが作れるのか、そのビジネスプランを提案してくれること、あるいはビジネスプランのアイデアのきっかけを出してくれること、そういった支援ができるシステムが必要ではないかと思う。